

# 京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

( 1 年計画の 1 年目)

## 1. 研究課題

四天王の展開に関する研究

The Development of the Four Guardian Kings

## 2. 研究代表者氏名

高橋早紀子

Takahashi, Sakiko

## 3. 研究期間

2019 年 04 月 - 2020 年 03 月 (1 年度目)

## 4. 研究目的

仏法を守護する護法神としてインドで誕生した四天王は、仏教の伝播とともにガンダーラや西域、中国、日本へと伝わり、各地で造像が行われた。その姿態や服制、持物などは多様で、こうした図像の多様性には各時代や地域における思想や信仰の反映が考えられる。しかし、これらの多様な図像の典拠や意味に関する検討が十分に行われているとは言い難く、四天王の展開についてはなお考察すべき問題が多く残されている。そこで本研究の目的は、様々な時代や地域における四天王の図像上の特色や宗教的機能について検討し、アジア的視野から四天王の展開に関する考察を深めることにある。具体的には、日本・中国・西域を中心とした四天王に関する研究発表に基づき、各専門分野の研究者とともに図像の変遷や宗教的機能の変容についての議論を深めることを目指す。日本・中国・西域・ガンダーラの美術史学や考古学を専門とする班員を中心に、広い視野から四天王の展開を考究する本研究には、分野横断的学際研究としての意義がある。

The idea of the four guardian kings who protect Buddhism was first developed in India and a lot of the associated imagery was created in Asian regions such as Gandhara, the Western Regions, China, and Japan during its eastward spread. Various iconographic features of the four guardian kings reflect specific thoughts and cults that are characteristic of each period and region. However, the transformation of this iconography and its religious functions have not yet been fully examined. Therefore, this research team seeks to investigate how the idea of the four guardian kings evolved throughout various periods and regions in Asia by examining its

iconographic features and religious functions. For instance, we will hold two workshops and discuss the transformation of these iconographic and religious functions in detail, based on the differing representations and imagery of the four guardian kings in the Western Regions, China, and Japan. This research team, including art historians and archaeologists who specialize in Gandhara, the Western Regions, China, and Japan, will advance interdisciplinary studies.

#### 5. 本年度の研究実施状況

四天王の展開をアジア的視野から検討すべく、10月27日と3月20日の二度にわたり、人文科学研究所を会場として「四天王研究の最前線」と題する研究会を実施することとした。第一回の発表者は高橋とゲストスピーカーの佐藤有希子氏(奈良女子大学)とし、班員以外の当該テーマに関心をもつ研究者にも公開した。当日は佐藤氏が急病で欠席されたためその発表原稿が代読されたが、最新の知見に基づく活発な質疑応答が行われた。第二回は班員の檜山智美が「西域北道の仏教石窟壁画に描かれた四天王とその眷属の図像」、ゲストスピーカーの三田覚之氏(東京国立博物館)が「法隆寺金堂における四天王の世界」と題する研究発表を行い、佐藤氏が前回の研究発表に関する補足コメントを行う予定であったが、新型コロナウイルスの流行で中止のやむなきに至った。

#### 6. 研究成果の概要

最終報告書に記載

#### 7. 本年度の研究実施内容

2019-10-27 四天王研究の最前線 東寺講堂四天王像と壇上結界 発表者 高橋早紀子  
中世絵巻にあらわされた毘沙門天像 発表者 佐藤有希子

#### 8. 共同研究会に関連した公表実績

なし

#### 9. 研究班員

所内

稲本泰生、岡村秀典、安岡孝一、倉本尚徳、向井佑介

学内

根立研介(大学院文学研究科)、内記理(大学院文学研究科附属 文化遺産学・人文知連携センター)、檜山智美(白眉センター)、アヴァンツィ・カルロッタ(大学院文学研究科)、折山桂子(大学院文学研究科)

学外

佐藤智水(龍谷大学)、石松日奈子(東京国立博物館)、外山潔(京都市立芸術大学)、山名伸生(京都精華大学)、佐々木守俊(岡山大学)、斎藤龍一(大阪市立美術館)、大西磨希子(仏教大学)、濱田瑞美(横浜美術大学)、上枝いづみ(金沢大学)、田林啓(白鶴美術館)、田中健一(文化庁)、高志緑(大阪大学)

10. 共同利用・共同研究の参加状況

| 区分            | 機関数 | 参加人数      |          |          |          | 延べ人数      |          |          |          |
|---------------|-----|-----------|----------|----------|----------|-----------|----------|----------|----------|
|               |     | 総計        | 外国人      | 大学院生     | 若手研究者    | 総計        | 外国人      | 大学院生     | 若手研究者    |
| 所内            | 1   | 5<br>(0)  | 0<br>(0) | 0<br>(0) | 0<br>(0) | 5<br>(0)  | 0<br>(0) | 0<br>(0) | 0<br>(0) |
| 学内            | 1   | 5<br>(3)  | 1<br>(1) | 2<br>(2) | 4<br>(3) | 5<br>(3)  | 1<br>(1) | 2<br>(2) | 4<br>(3) |
| 国立大学          | 3   | 3<br>(2)  | 0<br>(0) | 0<br>(0) | 1<br>(1) | 3<br>(2)  | 0<br>(0) | 0<br>(0) | 1<br>(1) |
| 公立大学          | 1   | 1<br>(1)  | 0<br>(0) | 0<br>(0) | 0<br>(0) | 1<br>(1)  | 0<br>(0) | 0<br>(0) | 0<br>(0) |
| 私立大学          | 4   | 4<br>(2)  | 0<br>(0) | 0<br>(0) | 0<br>(0) | 4<br>(2)  | 0<br>(0) | 0<br>(0) | 0<br>(0) |
| 大学共同利用機関法人    | 0   | 0<br>(0)  | 0<br>(0) | 0<br>(0) | 0<br>(0) | 0<br>(0)  | 0<br>(0) | 0<br>(0) | 0<br>(0) |
| 独立行政法人等公的研究機関 | 3   | 3<br>(1)  | 0<br>(0) | 0<br>(0) | 0<br>(0) | 3<br>(1)  | 0<br>(0) | 0<br>(0) | 0<br>(0) |
| 民間機関          | 1   | 1<br>(0)  | 0<br>(0) | 0<br>(0) | 0<br>(0) | 1<br>(0)  | 0<br>(0) | 0<br>(0) | 0<br>(0) |
| 外国機関          | 0   | 0<br>(0)  | 0<br>(0) | 0<br>(0) | 0<br>(0) | 0<br>(0)  | 0<br>(0) | 0<br>(0) | 0<br>(0) |
| その他           | 0   | 0<br>(0)  | 0<br>(0) | 0<br>(0) | 0<br>(0) | 0<br>(0)  | 0<br>(0) | 0<br>(0) | 0<br>(0) |
| 計             | 14  | 22<br>(9) | 1<br>(1) | 2<br>(2) | 5<br>(4) | 22<br>(9) | 1<br>(1) | 2<br>(2) | 5<br>(4) |

※( )内には、女性数を記載

11. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数  
なし

12. 費目の 30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由

第一回研究会はゲストスピーカーが当日急病で欠席したため、旅費と謝金が支払われなかった。第二回研究会はコロナウイルス流行で研究会が中止になったため、ゲストスピーカーの旅費・謝金、遠方の班員の旅費などが支払われなかった。

13. 次年度の研究実施計画

なし

14. 次年度の経費

なし

15. 研究成果公表計画および今後の展開等

なし